

深澤神社の太鼓と御輿

平成三年一〇月一日

秋山 元治

文中敬称略、昭和六、七年頃は不況のどん底で、東北では娘の身売り等が行なわれていました。

当時の深沢は田は埋立てられ、畑の中には現在の道や呑川が作られ区画整理の最中でした。

小学校では祭礼の時、その氏子は学校が

休みでした。この辺のお祭りは碑衾氷川様が九月 日、弦巻が十月八日、上馬十月十五日、深沢が新嘗祭十月十七日、新町が十月二十二日でした。

深澤神社は駒沢村時代二つあった村社の一つでした。

農村だった深沢の娯楽はお祭りと医王寺のお十夜余興だったのです。当時碑衾、弦巻、上馬、新町にはお神輿が二つも三つもありましたが、封建色の強かった深沢には

太鼓もお神輿もなかったのです。

不動睦会という今の不動前の商店街の
ようなものがありました。

その会長さんは大田屋の大田徳之助でした。

子供達があまり可哀想なので、
この不動睦会で今ある太鼓を昭和六、七年に
買い、御輿は樽御輿で子供達は
練り歩きました。

昭和十四年頃になってこれではあまりにも
寂しいので大人と子供二つの神輿を

買うつもりでしたがお金がないので、
大人も子供も担げる現在の中神輿に
したのですが、いざ祭礼になると大人達に
占領され子供達は全然担げませんでした。

その後、戦争に入り深澤神社からは毎日の
ように出征兵士が出発して行き、戦勝祈願が
行なわれました。

終戦になり、国民は皆虚脱状態になり、
神も仏も一時は忘れられ、生きて行く
食糧確保に精一杯でした。

昭和二十三年、深沢八丁目十三番地の聖母幼稚園のある西側に甲州の財閥の若尾宅がありました。桜新町の床屋のチェリーの柏谷由二は毎日若尾家に散髪に行っていました。

当時は食糧難の時代でも毎日園丁が二人いて池のまわりの植木の手入れをしているのでした。

池のわきに内宮（屋敷神）として現在の大人神輿がありました。

柏谷由二をとおして、昭和二十三年夏、お宮総代谷岡一夫、谷岡安久、谷岡銹一、三田靖朗、本田次郎吉、三田弥兵衛、森田竹松、秋山紋兵衛（順不同）の内の谷岡銹一にお神輿を買ってくれないかという話があったのです。

当時三十才位の谷岡銹一は総代会を三回開き他の総代を戦争が終った暗い時代に若い人に希望を持たせなくてはいけな説き伏せ、二十万円でお金は出来た時に

支払う約束で神輿を神社に持って来てしまつたのです。（戦争中、お宮に寄付の話があつたのですが、断わつたとの話がありました。）代金の支払いは一年位かかつたそうです。

当時地主は財産税、農地解放でお金は持っていませんでした。が、参考までに当時の物価を書いてみました。

土地は一坪一〇〇円 農地買収は一坪、畑は二円七〇銭、田は三円位でした。

闇値はジャガイモ、サツマイモ一貫（三・七五kg）百円、女性の白足袋三百円、絹のストッキング五百円、トタン板一枚千円、ドブクロ一升五百円、中古の冬オーバー七千円、建築費は坪当り一万円位かかりました。

さて、いざお神輿を買っても入れる場所がありません。昭和二十年秋、青年会が三田隆真を中心にして出来ました。

三田久雄、森田鉦二、森田博英、三田一夫、

大田喜淑、小沢節生、目黒清三郎などが集まりました。その青年会で二間四方の若尾宅にあつた神輿小屋を神社迄引き家することになりました。

引き家の鉄のレールは、戦時中に供出してしまったので、木の板の上に丸太を敷き、かぐらさんで引き家をしました。

皆、素人だったので、浅見正秋を大将にし、深沢駐在所のそばに住んでいた鳶職の大田鹿之助に監督を頼みました。

大田は足を悪くしていたので、リヤカーに乗って引き家監督をしてもらいました。食糧難の時代だったので、昼は畑をしなければなりません。引き家作業は毎夜行なわれ、三日がかりで神社迄運んで行きました。勿論、今のようには警察の道路使用許可など受けていませんでした。昼間は道路のわきに置いていました。女子の青年団が白米の握り飯、沢庵の炊き出しをしました。

当時は米だけの飯にはありつけなかった
（カボチャ、サツマイモ、大根、
ジャガイモ飯でした）のです。

若い人の神輿への意気込みを
感じさせられます。又、お神輿は若尾家の
お稲荷さんだったので、鳥居や狐が
ついていたので取除き改造してお神輿に
したのです。

その後、子供御輿も買いました。

平成三年一〇月一日

資料提供、谷岡鏑一

目黒清三郎